

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 21 日現在

機関番号：17701

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24653232

研究課題名(和文)子どもの危機と<治療 教育>～成長概念の現代的課題～

研究課題名(英文)Therapeutic and Pedagogic Approach to the Crisis of Children

研究代表者

前田 晶子 (Maeda, Akiko)

鹿児島大学・教育学部・准教授

研究者番号：10347081

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円、(間接経費) 360,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代における子どもの成長の危機という課題に対応するために、医学と教育における発達観の比較社会史研究を行った。その結果、目的と計画によって特徴付けられる教育的発達に対して、不確かさと向き合い危機を乗り越える治療的アプローチの有効性を明らかにした。

第1に、医学者富士川游が参加した児童研究を取り上げ、近代学校の発達観を対象化する治療的発達の思想があったことを明らかにした。第2に、江戸期の小児科学の全体像を明らかにするために、中国及び台湾において史料調査を行い、漢医学小児科の日本への受容の具体を分析した。第3に、フランスとドイツの医学的発達教育研究の日本への導入について検討した。

研究成果の概要(英文)： This study focuses on the relationship between pathologic and pedagogic approaches to child development studies. Through the historical analysis of ideas on growth and development of child in both fields, this study found that it is worth taking the therapeutic approach which considers child development as 'uncertainty' into pedagogy which tends to rely on scientific rationality.

First of all, this study identifies Fujikawa Yu's contribution to Child Research, in the introduction of his medical knowledge on pediatric diseases and distinctive therapeutic approach to educational fields. Secondly, it was analyzed how the Chinese pediatrics was introduced to Japan in Edo era. Thirdly, the study discussed about the importation of medical pedagogy from France and Germany.

研究分野：教育史

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：発達概念 富士川游 児童研究 山下徳治 小児科学 H.ワロン

1. 研究開始当初の背景

近年、小児の慢性疾患の増加などに伴って、医療現場における教育とケアの重要性が指摘されている。具体的には、一時点における医学的諸データを長期にわたる子どもの成長過程のなかに位置づけ、将来の不確かさを見通しながら支援していく柔軟な教育的アプローチが要請されている。しかし、日本の小児科における教育的サポートの整備が現時点で十分でないことは、医療従事者や法律家からも指摘されているとおりである。

同時に、教育現場においても、特別支援教育の拡大など医学の役割を再考する動きがみられる。脳科学や生命科学など進展する医学的知見が教育現場の子ども観を一変する事態がみられる一方で、「特別なニーズ論」や「追加的学習支援論」が従来の障害児教育の医学モデルを乗り越え、個別のケースに即した多様な対応を実現させていく動きも進んでおり、教育における医学の役割が複雑化している状況が存在し、その結果として、実践の基底にある発達論が大きく揺らぎ、再検討すべき状況に直面しているといえる。

このように、小児医療と教育の連携の必要性が高まっているにもかかわらず、実際には研究・実践の両面での協働が進まない状況がみられる。それゆえ、連携を阻んでいる課題を分析するために、実践を支える成長・発達観や身体論といったメタレベルでの概念整理が必要であると同時に、新たな子ども・成長観の構築が不可欠となっていると考える。

2. 研究の目的

本研究は、「子どもの危機と〈治療 教育〉～成長概念の現代的課題～」を主題として、現代社会を生きる子どもの成長を支えるための人間形成の新しい枠組みを提供することを目的としている。特に、「教育」を中心とし

て構成されてきた近代の成長・発達観を再検討し、危機と向き合うことが要請される現代の子どもへの「治療」を中心に据え、病理学的観点から人間形成の一般的課題を発想するアプローチをとる。そして、医学・看護学と教育学の双方における成長発達観を比較・整理すると同時に、医療・保育・教育の協働により子どもの育ちを実践的に支える包括的な枠組みを示すことを目指すものである。

本研究が小児医療と教育の2領域にまたがって成長概念の整理を行うという課題を設定するのは、第一に、子どもの発達を単に漸次に進展する安定的なものとして仮定するのではなく、「危機」のなかを生き抜くことが要請される現代社会における成長論の枠組みを提案することが必要であると考えからである。ここにいう「危機」とは、病気への罹患や自然災害など直接的に生命を脅かすものから、現代の社会システムの帰結としてのリスク(U.ベック)を含むものである。特に、身体的・精神的变化の著しい子どもの場合、危機そのものの把握も容易ではなく、見通しの不確かさを前提とした独自の成長観が導き出される必要がある。第二に、教師と医療者が協働して子どもの成長をトータルにサポートしていくためには、アプローチや子ども観の違いをふまえ、双方を俯瞰しながら実践を組織することが必須であり、医学・病理学的アプローチを教育実践に位置づけるための実践的な構造を明らかにすることが不可欠であると考えられる。第三に、近年の教育学における発達論批判の議論に対して、医学・病理学的観点を位置づけることで、発達概念の新しい理解(発生論的発達観)を提起することを課題としている点である。発達概念をめぐって、しばしばその数値主義や進化論的背景が批判の俎上に挙げられている。しかし、そのような議論

は、発達観の政治性や思想性を暴くことができても、そこから新しい枠組みを導き出すことは難しいと考える。本研究は教育と医学の関係史から、黎明期の子ども研究における学際的性格や、教育的価値の相対化の契機などを積極的に学びたいと考えるのである。

3. 研究の方法

本研究では、上述の課題に対して次の3つの方法によって研究を行った。

テーマ 子どもへのインフォームド・コンセントの実現という観点から医療現場において取り組まれている先行例の調査研究

テーマ 日本の西洋小児医学の制度化期（江戸後期～昭和前期）における小児科書と育児書の歴史研究

テーマ 治療教育の嚆矢をなすフランスの系譜（イタルやセガン）、補助学校など実践的蓄積のあるドイツの系譜（ヘラー）、日本の治療教育の系譜（第一世代（富士川游、呉秀三）から第二世代（三田谷拓、奥田三郎）へ）の比較研究

以上の三つの方法により、新しい子ども研究の枠組みを導き出す基礎的な作業を行うことを到達点とした。また医学・看護学の専門家と連携して進め、新たな研究体制を構築することも含意して取り組んだ。

これまで、教育学・教育史研究における小児医学の位置づけは決して高いものではなく、治療教育の領域においてさえ、医学的視点は成長論や社会的観点を欠く狭いものとして位置づけられてきた経緯がある。しかし、本研究は、教育学に先行して登場した「医学的子ども観」の蓄積を明らかにすることを通して、成長観の新しい地平を拓くことを目指している点に特徴がある。

この研究を通して、教育学内部での従来の発達概念をめぐる議論を発展させ、医療や福祉を含め、人が生涯を通してよりよく生きるための中心概念を導きたいと考える。

4. 研究成果

本研究では、現代における子どもの成長の危機という課題に対応するために、医学と教育における発達観の比較社会史研究を行った。いくつかのモノグラフに取り組む中で、全体として、目的と計画によって特徴付けられる教育的発達に対して、不確かさと向き合い危機を乗り越える治療的アプローチの有効性を明らかにした。具体的なモノグラフの概要は以下の通りである。

【富士川游と治療教育学】

第1に、医学者富士川游（1865-1940）が参加した明治～昭和前期の児童研究を取り上げ、近代学校の発達観を対象化する治療的発達の思想の形成に富士川が尽力したことを明らかにした。

これまで、治療教育学の学説史研究としては、三田谷啓や奥田三郎ら1920年代以降の研究と実践がその対象とされてきたが、彼らに一代先立つ富士川は、医学と教育学の初発の架橋を担って次代の実践の基盤を作ったという点で重要な役割を果たしたといえる。研究では、富士川が担った学の形成の質について、彼が依拠した海外の研究動向を整理・分析し、彼の引用傾向が必ずしもドイツ治療教育学に限定されるものではなく、欧米の小児医学、知能研究、新教育など幅広い領域にまたがるものであり、そういった広い地検を基盤としながら徹底して「治療学」（医学）を基礎学とした教育学を発想していたことを明らかにした。

また、病理学的な観点到に依拠した発達観の

特徴について考察した。雑誌『児童研究』への富士川の執筆活動を分析したところ、医学や病理学が特に思春期の人間形成に不可欠な役割を果たすことや、子どもの成長の正常性と異常性を明確に区別するのではなく、その境界領域に適切に関与しながら人間形成を支えるという特徴がみられた。これらは「不確実性」を特徴とする発達観としてとらえることができると総括した。

【江戸期小児科における子ども観】

第2に、江戸期の小児科学の全体像を明らかにするために、中国及び台湾において史料調査を行い、漢医学小児科の日本への受容の具体を分析した。

中国北京国家図書館（古籍館）では、漢医学小児科書を約20点にわたり閲覧し、特に明朝の著名な小児科医銭乙と董汲の書物及びその類書を検討した。黎明期小児科学における主たる理論と、その理論を支える症例研究（治験）の分析を行った。

また、台湾故宮博物院（図書文献館）では、明治初期に日本に来日し、多くの古籍を本国に持ち帰った楊守敬の文庫「観海堂」に収められている小児科書の閲覧を行った。ここでも、北京調査と同様の検討を行ったが、日本人による注釈などが朱書きされており、小児科学の受容がどのようにおこなわれたのかを具体的に跡づけることができた。

日本に残されている小児科書は、疾病の種類と処方解説した実用的なものが多いが、今回の調査を通じて、漢医学においては子どもの治験の蓄積があることが分かった。日本の小児科学においてどのように子どもの身体を観察し、治療行為を行っていたのか、そのことを明らかにする史料の収集と分析が残された課題である。

【フランス、ドイツにおける医学的発達研

究】

第3に、フランスとドイツの医学的発達教育研究の日本への導入について検討した。

フランスの心理学者アンリ・ワロン研究については、坂元忠芳氏による「L'Enfant turbulent」(1925)の研究を下に、ワロンの医学的発達研究の特徴をその症例分析などから考察した。

また、訪仏してフランス国立障害者教育・指導方法高等研究所を訪問した折に、フランス心理学における医学の伝統についての資料を調査・収集することができた。

次に、ドイツの医学研究の影響については、先に触れた富士川游の児童研究についての研究において中心的に分析を行った。富士川は、イエナ大学留学中にとくにヘッケルの進化論に学んでおり、彼の医学思想の形成に大きな影響を与えていることが明らかとなった。また、黎明期の治療教育学の形成を富士川が進める過程では、ドイツの医学や治療教育学説を中心に学びながら、医学を中核においた教育学や発達段階論の形成を目指していた点を指摘した。

加えて、ドイツ・マールブルク大学に留学し、日本の新教育、新興教育、スポーツ教育などに貢献した山下徳治の研究を通して、ドイツの哲学や教育思想の日本への影響を考察した。さらに、彼が人間発達の思想を「労働」や「社会」といった概念を中核に位置づけながら再構成していった過程や、戦後にドイツ・ケルン体育大学学長のカール・ディームとの関係の中で青少年のスポーツについて研究をシフトしていった点を考察した。

日本の発達研究におけるフランスとドイツの影響の比較史は、今回の研究ではその全体像を見渡すところまでは到達しなかった。しかし、この研究は、日本近代史における発

達と医学の関係を明確にする上で欠くことのできないものであり、今後はフランス、ドイツ、日本における子どもの症例分析を具体的に比較する中で、比較研究を進めていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

(1)前田晶子「山下徳治における発生論の形成(4)」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第23巻、2014、193-200

(2)前田晶子「富士川游と治療教育学」『日本の教育史学』第56集、査読有、2013、59-75

(3)前田晶子「山下徳治における発生論の形成(3)」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第22巻、2012、137-145

[学会発表](計0件)

[図書](計1件)

木村元、前田晶子、大西公恵、高瀬雅弘、仲島愛子(他5名)『近代日本の人間形成と学校』クレス出版、2013年

6. 研究組織

(1)研究代表者

前田晶子(MAEDA, Akiko)

鹿児島大学教育学部

研究者番号:10347081

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

山下早苗(YAMASHITA, Sanae)

鹿児島大学医学部

研究者番号:40382444